

日本の詩歌

日本の歌（歌謡）の起源は原始的な
 集団生活や宗教儀式における民間舞踊
 に求められる。

舞踊という全身的な情緒の表現から
 言語的要素が分離し、次第に複雑な形を
 成して行って、文学に発展して行ったの
 である。

上代の歌謡は詩型も定まっていなかったが、
 日本で初めての歌集である万葉集は短歌、
 長歌、旋頭歌などの形式の整ったものを
 集大成している。これらの詩は、短歌が
 五七五七七、長歌が五七の句の繰り返し、
 旋頭歌が五七七五七七と、すべて五七調
 を基礎にしている。

ちなみに ^ご ^{しち} ^{きすう} ^{ちゅうごく} ^{せいすう}
 因に五、七という奇数は中国では聖数
 と見なされているということであるが、
 わか ^ご ^{しち} ^{じゅうにおん} ^{ひとこきゅう}
 和歌においては五、七の十二音が一呼吸
 の長さとしても最適であったこととも
 かんけい
 関係しているのではないかと思われる。

にほんどくとく ^{しけいしき} ^{わか} ^よ
 この日本独特の詩形式を和歌と呼んでい
 るが、^{きょうぎ} ^{ごひろ} ^{おこな}
 狭義にはその後広く行われるよう
 になった^{たんか} ^さ ^{わか} ^い
 短歌を指して和歌と言うことも
 ある。

たんか ^{ごしちごしちしち} ^{さんびんおん} ^な
 短歌は五七五七七の三一音から成る、そ
 の名の通り^な ^{とお} ^{みじか} ^{しけいたい} ^{ため}
 短い詩形体であるが（その為、
 たんか ^{さんじゅういちもじ}
 短歌のことを三十一文字 [みそひとも]
 とも言う) ^い ^{しぜん} ^{びょうしゃ} ^{かんじょう} ^{きび}
 自然の描写や感情の機微を
 かんけつ ^{ひょうげん} ^{かくちようたか} ^し
 簡潔に表現する、格調高い詩であると
 い
 言えよう。

きゅう ごねん てんのう いのち はじ
 九〇五年には天皇の命によって初めての
 ちよくせんわかしゅう ここんわかしゅう な
 勅撰和歌集である古今和歌集が成った。

かしゅう ろっかせん い ありわらのなりひら
 この歌集には六歌仙と言われた在原業平
 うた はじ さくしゃ わ よ
 などの歌を始め、作者の分からない「詠
 ひとし うた たすうおさ
 み人知らず」の歌も多数収められており、
 当時和歌が広く盛んに行われていたこと
 が知られる。

つい い みち き
 遂に行く道とはかねて聞きしかど
 きのうきょう おもう
 昨日今日とは思はざりしを
 ありわらのなりひら
 [在原業平 十六 八六一]

さいご だれ い みち しで みち
 「最後には誰も行く道～死出の道とい
 うものがあることは以前から聞き知って
 いぜん き し
 はいたけれど、それが昨日今日というさ
 きのうきょう
 せま おも
 し迫ったものとは思わなかったことよ」

かぜうふ おき しらなみ やまやはん きみ
 風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君が
 ひとりこゆらむ

〔よみ人しらず 十八 九九四〕

かぜ ふ はる おき しらなみ た
 「風が吹いているので遥か沖の白浪が立
 つが、この夜更けにあなたは今頃立(龍)
 たやま ひとり
 田山を一人で越えているのでしょうか」

ちゅうせい はい たんか うえ く
 中世に入ると、短歌の上 [かみ] の句
 ごしちご した く しちしち
 (五七五) と下 [しも] の句 (七七) を
 こうご つづ れんが あたら けいしき
 交互に続けていく連歌という新しい形式
 うた りゅうこう こっけい
 の歌が流行したが、このうちの滑稽みを
 ぜんめん う だ はいかい
 前面に打ち出したものが俳諧である。

はいかい ゆうぎてき ようそ たぶん も
 俳諧はもと遊戯的な要素を多分に持って
 いたが、まつおぼしょう じゃく りそう
 いたが、松雄芭蕉は「寂」を理想とする
 い詩として、俳諧を芸術にまで高めた。

はいかい だいいちく ほっく どくりつ
 俳諧の第一句（発句〔ほっく〕）を独立
 させたものを後に俳句と言う。

はいく ごしちご じゅうしちおん ていけい もっと
 俳句は五七五の十七音を定型とする最
 も短い詩形体であり、季節を表す季題
 や、一句に完結性を与える切れ字を詠み
 込むのが原則である。

枯れ枝に鴉のとまりたるや秋の暮れ
 〔芭蕉 「東日記」〕

夏草や兵どもが夢の跡
 〔芭蕉 「奥の細道」〕

菊の香や奈良には古き仏たち
 〔芭蕉 「笈の小文」〕

旅に病んで夢は枯野を駆け廻る
 〔芭蕉 辞世の句〕

芭蕉やその門人は俳諧を庶民の詩として確立することに努めた。

折しも江戸時代には町人が経済力にものを言わせて力を増し、生活にゆとりを生じて来たので、文化活動にも積極的に参加するようになり、町人文化がここに花開いた。

芭蕉の門人も多くは町人出身であったという。

しかし洗練された芸術である俳諧に習熟するには相当の教養が必要であり、庶民にはまだ難しく、親しみにくい文芸であった。

したがって彼等は俳諧と同じ形式でもっと簡単な前句付の方を好んで行うようになった。

前句付というのは五の句を出題し、それに七五の対句を詠んでその付合の面白さを味わう遊びである。

柄井川柳簡単な題に対して五七五の句を詠ませ、それを独立の詩として確立したので、後にはこれを「川柳」と言うようになった。

優雅な俳句に対して、川柳は通俗的なことも堂々と言い表し、そこに大衆文学としての価値を見出すことが出来る。

俳句を「表の芸術」とすれば、川柳は「裏の芸術」とも言えよう。

座敷牢夢は廓をかけめぐり
〔古川柳 「排風柳樽」〕

風吹けばどころか女房嵐なり
〔古川柳 「排風柳樽」〕